

研究成果報告書

作成年月日 2025年 10月 31日

一般財団法人加藤育英基金 御中

研究機関(大学)名 神戸親和大学

研究代表者 葦原 摩耶子

貴財団から給付を受けた助成金を活用し、下記のとおり研究を行いましたのでその成果を報告します。

記

1 研究課題: 若年者の食や食の安全にまつわる誤情報に対する耐性研究

2 研究期間: 自 2024年 4月 ~ 至 2025年 9月

3 助成金額: 95万円

4 共同研究者:

・帶川 きよら(神戸親和大学)

5 研究報告:(研究内容(概要)を1,500~2,000文字程度で)

若年者の食や食の安全にまつわる誤情報の耐性となる要因を明らかにするため、大学生を対象として以下の研究を実施した。

研究1:若年者の食や食の安全に対する意識の実態調査

若年者の食の安全に対する意識把握し調査項目を選定するため、大学生3名(男性1名、女性2

名)にインテビューを行った。その結果、食の安全に対しては「食物アレルギー」「食中毒」「食物の衛生管理」を連想し、特に「食中毒」のイメージが強いこと、大学で「栄養学」などの授業を受けていても「食の安全」について学習する機会が少ないと、情報を検索する際に複数の情報源を見比べるなど気を付けている反面、流行に流されごく身近な人の口コミを重視する傾向もみられることが確認された。インテビュー結果と先行研究のレビューを踏まえ、若年者の食の安全に対する耐性となる要因の調査項目として、健康情報の批判的思考(山本ら、2014)と情報処理の直観性(古田ら、2020)を含めることとした。また誤情報については疑似科学信奉尺度(菊池、2017)のうち食や健康に関する項目を利用することとした。

研究2:若年者の食や食の安全にまつわる誤情報の耐性に関するアンケート調査

食や食の安全にまつわる誤情報の耐性として、情報源を精査すること、健康情報の批判的思考を有すること、直観的に判断しないことが有効に働くと仮説を立て、調査を実施した。

1. 予備調査

大学生59名(男性17名、42女性名、平均年齢 $20.71 \pm .67$ 歳)に調査し、健康情報の批判的思考と情報処理の直観性が有意な負の相関を、疑似科学信奉度と情報処理の直観性は正の相関を示す傾向を確認した。健康情報の批判的思考と疑似科学信奉度に関連がみられなかったため、本調査では消費者庁の食品安全総合情報サイトで公開されている食の安全クイズを加えることとした。

2. 本調査

大学生201名(男性93名、女性105名、回答しない3名、平均年齢 $19.07 \pm .79$ 歳)に調査を実施した。調査項目は、1)年齢、2)性別、3)栄養に関する講義の受講状況、4)普段の食事の準備状況、5)食品購入時に確認する表示、6)食の安全に関する意識、7)食や健康に関する情報源、8)情報処理の直観性、9)健康情報の批判的思考、10)疑似科学信奉尺度、11)食の安全クイズであった。データ分析には、SPSS31を使用した。

直観性は、内藤ら(2004)の情報処理の直観性と合理性の尺度から古田ら(2020)が12項目を抜粋し、対象者の中学生に合わせて直観性の高さを測る1因子構造として使用されたものだった。本調査は対象者が大学生のため分析に先立ち因子構造を確認したところ、内藤ら(2004)と類似した情報処理の直観性と合理性の2因子構造が確認された。食や健康に関する情報源は、ウェブ上の情報(ウェブサイト、SNS(X、Instagramなど)、YouTubeなど動画サイト)、紙媒体(新聞、本、雑誌)、TV・ネットニュース(TVのニュース、ネットニュース)、口コミ(口コミサイト、家族や友人の口コミ)の4因子構造が確認された。

主な結果は以下のとおりである。対象者の特徴としては、普段の食事は自炊30.3%、家族等の調理したもの59.7%、中食5%、外食3%、その他(寮食)2%であった。食や食の安全に関する意識としては、食の安全は重要だ(やや当てはまる16.4%、とても当てはまる73.6%)、および食の安全に关心がある(やや当てはまる42.3%、とても当てはまる26.9%)とともに高く評価している

が、食の安全に関する知識を持っている(やや当てはまる19.4%、とても当てはまる10.4%)については不足していると評価していた。大学における栄養学関連の講義の受講状況は、履修した38.8%、履修中5.5%、履修したことない55.7%であった。食品購入時に確認する表示については、値段や賞味・消費期限は約6～7割の者が確認しているが、カロリーは約4割、メーカーや原材料は約1.5～2割に下がり、食品表示の詳細を確認しない傾向が見られた。

疑似科学信奉尺度得点と食の安全クイズの正答数の性差を χ^2 検定で検証したところ、疑似科学信奉尺度得点は有意に女性が高く、食の安全クイズにおいても男性のほうが正答数が高い傾向がみられたため、誤情報への耐性要因については男女別に検討することとした。

男性の耐性要因を明らかにするため、疑似科学信奉度、食の安全クイズ正答数を従属変数に、健康情報の批判的思考、直観性、合理性、ウェブ上の情報、紙媒体、TV・ネットニュース、口コミを独立変数として変数増加法による重回帰分析を実施した。その結果、男性の疑似科学信奉度には、ウェブ上の情報が正の影響を与えていた。また食の安全クイズの正答数には、直観性が負の影響を与えていた。

女性の耐性要因を明らかにするため、疑似科学信奉度、食の安全クイズ正答数を従属変数に、健康情報の批判的思考、直観性、合理性、ウェブ上の情報、紙媒体、TV・ネットニュース、口コミを独立変数として変数増加法による重回帰分析を実施した。その結果、女性の疑似科学信奉度には、ウェブ上の情報と口コミが正の影響を与えていた。また食の安全クイズの正答数には、有意な変数が示されなかった。

6 具体的な成果:

- ① 大学生の食の安全に関する認識は、食中毒が中心で偏りがみられた。
- ② 食の安全の重要性の認識や関心度は高いが、知識は十分でないと評価していた。
- ③ 値段、カロリー以外の食品に表示されている情報の詳細は確認しない傾向が示された。
- ④ 男性の食や食品にまつわる誤情報の耐性要因として、ウェブ上の情報源の利用を減らすこと、直観的に判断しないことが示された。
- ⑤ 女性の食や食品にまつわる誤情報の耐性要因として、ウェブ上の情報源と口コミの利用を減らすことが示された。

7 発表論文、著書、講演など:(予定を含む)

- (1) 健康心理教育実践センターの研究会にて発表を予定している
- (2) スポーツ栄養学会または健康心理学会、スポーツ教育学科研究紀要のいずれかにおいて論文投稿を予定している

以上